

4. アマチュアリズム論－差別なきスポーツ理念の探求－

内海 和雄

目次

はじめに

1. 研究論
2. 現状・歴史・外国
3. プロとアマ、共に資本主義社会の事象
4. アマチュア
5. アマチュアリズム研究
6. スポーツ所有論

第1部 アマチュアリズム研究の現状とス

ポーツの所有史

第1章 アマチュアリズム研究の現状

1. 概念・定義
2. アマチュアリズム研究の歴史
3. 近年のアマチュアリズム擁護論

第2章 スポーツの所有史

はじめに：スポーツ所有の社会発展史

1. 各社会の所有形態
2. 19世紀のイギリスとヨーロッパ
3. スポーツ普及・福祉・基本的人権

第2部 アマチュアリズムの形成

第3章 アマチュアリズムの歴史

1. アマチュアリズムの変遷
2. 日本での変遷

第4章 アマチュアリズム変遷の時期区分

1. アマチュアリズムの成立・普及：第1期
2. 経済的規定の矛盾拡大：第2期
3. アマチュアリズムの崩壊期：第3期
4. スポーツ理念の模索期：1990年代以降

第5章 アマチュアリズムの構造

1. 高度化における排除：排除①
2. 大衆参加の排除：排除②
3. ブルジョアジーの統合：「創られた伝統」
4. アマチュアリズムの本質
5. なぜスポーツのみに？
6. スポーツ普及、伝搬の基盤

第6章 アマチュアリズムとナショナリズム

1. ナショナリズムとは何か
2. アスレティズムとアマチュアリズム
3. ナショナリズムとアマチュアリズム
4. スポーツ的ナショナリズムと政治的ナショナリズム
5. 結合と分離
6. 日本の場合
7. ナショナリズムとの結合
8. スポーツとナショナリズム

第3部 アマチュアリズムの否定と克服

第7章 戦間期のオールタナティブ：大衆化でのアマチュアリズム否定

1. 第1次世界大戦前の労働者スポーツ
2. 国際労働者スポーツ運動の誕生
3. 女性スポーツ運動の台頭
4. 英国帝国大会(The British Empire Games)
5. オリンピックの影響

第8章 スポーツ・フォー・オールとアマチュアリズムの否定

1. スポーツ・フォー・オールとは何か
2. スポーツ・フォー・オール
3. プロを支えるスポーツ・フォー・オール
4. スポーツ権はアマチュアリズム否定

第9章 プロの役割（スポーツ文化の開拓者）とアマチュアリズムの否定

1. プロ・スポーツの本質
2. プロ・スポーツの歴史
3. アマチュア資格剥奪
4. シアマチャの誕生：準プロの役割
5. プロのセカンドキャリア問題

第10章 市場化によるアマチュアリズムの否定と克服

1. スポーツの市場化の諸相
2. 初期の市場化とアマチュアリズムの否定
3. アマチュアリズムへの資本の参入
4. オリンピックの放映権料

第4部 スポーツ理念の確立へ

1. アマチュアリズムの機能の確認

2. 差別なきスポーツ理念の探求

高度化、大衆化、社会的統合を網羅して（公共性、スポーツ・フォー・オール、平和）最後に

はじめに

本書は『プロ・スポーツ論—スポーツ文化の開拓者—』（創文企画、2004）の姉妹編である。そして現在進めている「オリンピックと資本主義社会」、「スポーツと資本主義社会」の一環である。当初、オリンピック研究の1つの章として考えていたが、単にオリンピックの範囲ばかりでなく、近代スポーツ全般に関わる事項であるところから、1つの独立した書として提起するものである。

また、本書は、一橋大学大学院社会学研究科スポーツ社会学の「国際スポーツ論」（2006年度夏学期）での講義ノートである。具体的な素材としてアマチュアリズムを検討したものであるが、大学院生が対象であるから、論文作成の課題論、方法論、資料収集・資料解釈、実証方法、時期区分、結論など、論文作成の基本的な考え方、論文作成の具体的なイメージを示そうとした。そしてその過程で具体的に論文を書き上げる1研究者としての教師の生き様をも示そうと考えた。

1. 課題論・方法論

さて、はじめにと第1章は課題設定、課題論である。なぜアマチュアリズムの本質把握の研究が今必要となるのか。これは日本のスポーツ界の現状分析とその分野の先行研究との交点から導き出される。つまり、現在のスポーツ界でアマチュアリズムは如何に影響を与え、如何に影響を受けているのかという点である。他方でアマチュアリズム研究はそれらの問題にどのように対応してきたのかという先行研究分析が必須である。そしてその両者の交点で本研究の課題が設定される。簡単に言えば、既に先行研究があれば新たな研究は不必要だし、そのことの事実確認が先ず必要である。

そしてもし無いとすれば、そこに新たな研究課題の設定がなされることになる。したがって、現状解釈もより厳密さが求められる。

次いで、研究方法論である。そうした課題設定が可能かどうかはそれを究明する方法論が見え始めるときにおいて、初めて設定しうるものだからである。ここにはその基礎となる資料の存在があるのかどうか、あるいはその課題を展開するための論理展開が可能かどうかである。学生の卒論、院生の修士論文・博士論文で彼らが最も苦闘するのがこの点である。自分がやりたいテーマは即研究課題とはならない、そこには研究方法論が明確にならなければ解明できない。時折、資料も十分に無いのにそのテーマに拘りすぎて、教員との関係まで崩れる学生・院生もいたりして、困る場合もある。「先生は私のテーマに反対している。いつも潰そうとする。」となると、感情論のレベルになってしまう。教員の側としては、その学生・院生のやりたいこと、テーマを尊重しているのだが、方法論が無いものは、その明確化を求めるが、それには全く応えられず、先のような感情となってしまう。こういう場合は、先輩の院生が後でじっくりと指導してくれる「アフター」が私の理想とするところである。

こうした研究方法是認識論上、研究者の意識が主観的に創り出すものでなく、対象それ自体が有する「構造的性と歴史性」である。研究とはそれらに分け入り、その構造的性と歴史性を究明することに他ならない。認識論的にいうなら、対象の認識であり、対象の意識への客観的な反映である。この点で本研究は観念論では無く、唯物論の立場に立っている（立とうと努力している）。こうした視点の理解とそれを形成するためのトレーニングもまた大学院教育の重要なテーマであろう。

2. アマチュアリズムの形成

「第2部 アマチュアリズムの形成」は3～6章である。「第3章 アマチュアリズムの歴史」はイギリスやオリンピックにおけるアマチュアリズムの変遷であり、日本での変遷である。「第4

章 アマチュアリズム変遷の時期区分」は4期に区分してその歴史を捉えている。第1期はアマチュアリズムの成立・普及であり、第2期は経済的規定の矛盾拡大の時期である。第3期はアマチュアリズムの崩壊期であり、第4期はスポーツ理念の模索期である。そして「第5章 アマチュアリズムの構造」は本書の中心を形成する。つまりアマチュアリズムとは資本主義社会におけるスポーツのブルジョアジー（資本家階級）による独占＝労働者階級の排除である。排除は高度化における排除と大衆参加の排除という2つの側面を持つ。そして排除は一方でブルジョアジーの統合の機能を持っている。これらはこの時期の「創られた伝統」（E・ホブズボウム）の一環でもある。アマチュアリズムは資本主義社会において、資本家自らがスポーツから資本を排除した。これは資本主義社会において基本的な矛盾である。こうしたアマチュアリズムはなぜスポーツ領域にのみ生まれたのか。それは他の文化が、その文化に接近するのがそれなりの経済力を必要としているために、労働者階級ははじめから排除されていた。しかし労働者の肉体労働はスポーツのトレーニングにもなった。例えば当時急速に普及した新聞配達夫、郵便配達夫、牛乳配達夫（更に日本では人力車夫）等は「足を業とする」者であり、確かに長距離走は強く、各競技会で上位を独占していた。それ故、スポーツ界でのみアマチュアリズムが生まれたのである。このスポーツがイギリスから世界各国に普及したが、各国のブルジョアジーたちは共通して労働者階級の台頭に頭を痛めており、アマチュアリズムはスポーツ界から彼らを排除できる装置であったので、挙って導入した。そして「第6章 アマチュアリズムとナショナリズム：統合」ではアマチュアリズムがナショナリズムと結合したことを述べた。イギリスでは中世の騎士道からのフェアプレイ精神なども結合して「アスレティシズム」となり、またパブリックスクールではキリスト教とも結合して「マッスルクリスチャニティ」となった。こうして、アマチュアリズムは一時、ナショナリズムと結合したのである。ところで、

スポーツ場面で語られるナショナリズム（スポーツ的ナショナリズム）と政治的ナショナリズムとの関連は如何に捉えられるべきなのか。

3. アマチュアリズムの否定と克服

「第3部 アマチュアリズムの否定と克服」は第2部の形成が否定され、克服される領域と過程である。当然にこれは形成の領域に対応している。「第7章 戦間期のオールタナティブ：大衆化でのアマチュアリズム否定」であり、第1次世界大戦前の労働者スポーツ、国際労働者スポーツ運動の誕生、女性スポーツ運動の台頭とアマチュアリズムの否定、克服である。また英国帝国大会(The British Empire Games)も1890年に提起され、相対的に低下しつつある大英帝国のナショナリズムを煽ることを目的とした。結局は1930年に第1回が行われ、現在まで継続している。それらの諸活動にオリンピックの影響は絶大であった。「第8章 スポーツ・フォー・オールとアマチュアリズムの否定」は戦後の福祉国家の第2段階における高度経済成長が「新しい人権」の高揚をもたらし、スポーツ・フォー・オール政策が国家的な必須の政策となり、それがアマチュアリズムを大衆化の点から否定した。そして一方、プロ・スポーツの発展もスポーツ・フォー・オールによる大衆化の高揚が支える。これらはスポーツ権の保障である。つまりスポーツ権はアマチュアリズムの間接的な否定である。「第9章 プロの役割（スポーツ文化の開拓者）とアマチュアリズムの否定」は、まさにアマチュアリズムの否定そのものである。「第10章 市場化によるアマチュアリズムの否定と克服」はアマチュアリズムが否定したスポーツの市場化が、資本主義の高揚に伴い、スポーツの高度化のいっそうの進行の中で、そして前記の大衆化によって、スポーツの市場化が進んだ。これによってアマチュアリズムは根底的に崩壊した。

4. スポーツ理念の確立へ

「第4部 スポーツ理念の確立へ」はこれまで述べたアマチュアリズムの機能の再確認をした上

で、アマチュアリズムに代わるスポーツ観の確立へ向けた提言を行う。特に、高度化、大衆化の克服は、スポーツ・フォー・オール政策の一層の推進以外にないこと。それ故に新自由主義で破壊された公共責任を再度確認して、スポーツの「権利・公共性」に基づく政策、新福祉国家的政策が必要であること。さらに、スポーツ特に国際的なスポーツイベントは一方で政治・経済的な利用、つまりオリンピックやサッカーワールドカップなどが単にスポーツイベントとしてではなく、むしろ主要には国や自治体の政治・経済的な利用のための招致・開催となっている現実の中で、他方では、それでもスポーツイベントとして、国際的交流、相互理解の重要な機会であり、世界平和へ大きく貢献していることも事実である。

最後に、資本主義社会で資本家自らスポーツから資本を排除したのがアマチュアリズムの別の表現であった。したがって資本主義の発展に伴ってスポーツにも資本が入り込み、またスポーツ界が資本に入り込み、当然にアマチュアリズムが崩壊した。その過程は本書で見てきた通りである。しかし、この資本とスポーツとの関係の歴史研究は余り行われていないようだ。商業主義の弊害が叫ばれている中で、スポーツと資本との関連も重要な実践的、研究的テーマである。

以上、『アマチュアリズム論』の概略を述べた。以下、院生の講義ということもあり、一般的な研究論についても記しておきたい。

5. 現状・歴史・外国

論文の内容に直接的に関わることはないが、社会科学研究者としての「研究スタイル」について触れておきたい。自然科学と違って、個別の国家的な枠組みに大きく規定される社会科学の場合、「現状・歴史・外国」のバランスのとれた研究が必要であるといわれる。それは個人の場合でも、領域全体の場合でも同様である。社会科学であるから、自国の現状の課題意識が研究課題設定の入り口である。それがないままの歴史研究や外国研究は「観照的」で、只事実を記述するだけと

いうものである。その結果、「それでどうした？」という質問で却下されてしまう。「その歴史が好きだから」、「その国が好きだから」というだけでは、社会科学研究とはならない。なぜその歴史を研究するのかという歴史研究、あるいはなぜその外国を研究するのかという外国研究（比較研究）は、それが直接的、間接的を問わず、常に日本の現状とのつながりの論理が求められる。（内海和雄『イギリスのスポーツ・フォー・オールー福祉国家のスポーツ政策』不昧堂出版、2003年）こうした3つの領域のバランスのとれた研究者・研究領域は、常に現在の課題に結びつきながら、歴史と外国からもヒントを得ながら、研究課題が鮮明で、バランスのよい研究が持続する。

6. プロとアマ、共に資本主義社会の事象

本書は冒頭に述べたように拙著『プロ・スポーツ論—スポーツ文化の開拓者—』の姉妹編である。プロ・スポーツ論が主に「見るスポーツ」を対象とすれば、アマチュアリズム論は「するスポーツ」を主な対象とする。アマチュアとプロは共に資本主義社会が産んだスポーツの在り方である。それ故に、両者がセットになって初めて、資本主義社会のスポーツ像の探求が成立することになる。

プロ・スポーツは資本主義社会の中で、いち早くスポーツを市場化（商業化）の対象として成立させ、「見るスポーツ」「見せるスポーツ」として完成させた。一方、アマチュアスポーツはアマチュアリズムによって、スポーツを労働者階級（大衆）へ普及することをブロックする事によってスポーツの市場化を極力制限した。こうしてみれば、資本主義社会においてプロ・スポーツがより適格的であり、アマチュアリズムは多大な矛盾を抱えることになった。ともあれ、この両者が時々の歴史社会的な基盤の上で、相対的に把握されながら、一方で総体的に把握されることによって、スポーツと資本主義社会との関連が把握される。

7. アマチュア

現在「アマチュア」という用語は、音楽、芸術

の世界などでは「愛好者」「素人」という意味で使われている。時には「プロよりも技術的に劣り、音楽で食えない連中」というやや蔑んだ意味合いも込めて使われる場合もある。特に前2者は中世末期から貴族のスポーツ愛好者を意味するものとして使われた。その意味合いは、貴族という階級をはぎ取れば現在も同様に活用されている。しかし、19世紀中頃から20世紀後半まで約100年余続いたアマチュアリズムに包含されたアマチュアは全く異なった意味を有し、アマチュアリズムを体現した者を指すようになった。つまりアマチュアリズムが、台頭する労働者階級を排除する目的で中流階級である近代ブルジョアジー（資本家階級）以上の中・上流階級の特権的なスポーツの所有を意味するイデオロギーや制度となった。そのアマチュアリズムが崩壊した今、アマチュアはそうしたイデオロギーを再び払拭して上記のような現在の意味合いとなって活用されている。もっとも、アマチュアリズムの時代にも、アマチュアリズムに包含されない、またプロではない、スポーツ愛好者は多少いたわけだが、彼等は現在と同じ意味でのアマチュアであり、アマチュアリズム時代の彼等の呼称としては取り敢えず、「アマチュアリズム外のアマチュア」とでも呼んで置きたい。

8. アマチュアリズム研究

それではアマチュアリズムとはいったい何であったのか。それは今や歴史的に生成－成長－崩壊の完結した事象であり、確かに過去の遺物となりつつあるが、しかし一方では現在のスポーツ、スポーツ観をも未だに潜在的に規定しているところがあり、沈殿しながらも、時には再浮上する場合もある。社会科学的にしっかりと把握しておかないと、スポーツの歴史観、そして現実の理解に誤解とブレを生じさせる。その点で本書は、そのアマチュアリズムを社会科学の俎上に載せようという試みである。

アマチュアの対概念はプロである。それは相互に人間の1つの属性であるが、しかし、アマチュアリズムの対概念はプロではない。アマチュアリ

ズムとは観念（イデオロギー）でありその具体化の制度（ルール）であるからである。一部にプロフェッショナリズムという用語（プロ根性の意味で）も使用されているが、歴史的、社会的に共通語となっているものではなく、その意味も使用者の主観で多様である。この両者がかなり曖昧に理解されているから、この点での識別は重要である。そしてその点の究明が本研究の意図でもある。

スポーツの高度化、プロ化の進行、コマーシャリズム（商業主義）の浸透、スポーツ・フォー・オール政策の浸透の中で、高度化においても、大衆化においても、1980年代には多くの種目で、オリンピックで「オープン化」というプロ容認が採用された。こうして100余年にわたって実行されてきたアマチュアリズムは崩壊した。かつてアマチュアリズムの下でプロは蔑まされた。しかし、このプロ容認の過程で、そうした差別感がいかに克服されたのか、正しく分析しておくことも研究の課題であろう。社会科学から見て極めて重要な歴史上の事実を、闇に葬ってはいけない。

現在の若者はプロが華やかで一種のあこがれの対象として育っているが、かつてアマチュアリズムによってプロが蔑まされていたことは彼らには感覚的には理解できないことである。それだけに、アマチュアリズムの客観的な研究成果として銘記し、彼らに伝えることも必須な作業である。

確かに、コマーシャリズムはスポーツの世界を資本主義社会の一員としての自覚をもたらし、アマチュアリズムによって瀕死の状態であった国際的なないし国内的なスポーツ組織・団体の崩壊を防ぎ、スポーツの発展へと転換する活力を与えた。しかしグローバリゼーションの中で、過剰な商業主義化やナショナリズムによる勝利至上主義、ドーピングなどの弊害が激化する中で、そのスポーツを崩壊させる要因も生じている。それゆえにアマチュアリズムの「純粋性」への郷愁、回帰が一部に生じている。

本研究で、私はアマチュアリズムを批判的に述べるが、現在のアマチュアについては批判的ではない。むしろ逆である。拙著『イギリスのスポー

『ツ・フォー・オールー福祉国家のスポーツ政策ー』
（不昧堂出版、2003 年）、『日本のスポーツ・フ
ォー・オールー未熟な福祉国家のスポーツ政策ー』
（不昧堂出版、2005 年）も一般大衆へのスポーツ
普及の政策研究であり、いわばアマチュア・スポ
ーツのより一層の増加を望んでいる。もちろん「プ
ロ・スポーツ」もスポーツ文化の開拓者として両
者の併行は必須であり、どちらか一方だけとい
うのは不可能である。

9. スポーツ所有論

私はこれまで、『スポーツの公共性と主体形成』
（不昧堂出版、1989 年）以降、スポーツ所有論と
いう視覚からスポーツを捉え、論じてきた。つま
り、どの歴史、社会で如何なるスポーツが行われ
たかという研究は沢山あるが、その歴史、社会
の中でいったい誰がそのスポーツ文化を享受(所有)
したのかという社会科学の基盤とも言うべき所有
論的研究が極めて少ないことに気づいて以来、通
史的にも、そしてスポーツ・フォー・オール政策
という資本主義社会の 1 つの現象についても研究
してきた。その上で、スポーツは公共的な文化で
あり、それぞれの社会でその所有を巡って、権利
（特権）が生じていることを見極めて、「スポー
ツの権利・公共性」という概念を提起した。

そしてこの間のイギリスと日本のスポーツ・フ
ォー・オール政策の比較研究、そしてプロ・スポ
ーツ論も、そして現在推進しているオリンピック
研究も、すべては資本主義社会のそれぞれの断面
を形成しているという自明の認識に達した。その
ことはまた、今我々が慣れ親しんでいる近代スポ
ーツもまた、資本主義社会の成立発展と切っても
切れない関係にあることである。しかしそれにも
かかわらず、それを焦点化した研究もまた極めて
少ない。同じ事を 20 年前に、カナダのリチャ
ード・グルノーも述べている。（勉強不足の私は、
実は最近この本を知った。リチャード・グルノー
『スポーツの近代史社会学～階級・スポーツ・社
会発展の理論とカナダにおける実証～』岡田猛他
訳、不昧堂出版、1998 年、Richard Gruneau,

Class, Sports and Social Development, University of
Massachusetts Press, 1983)

そうする内に、そうした状況を放置しておいて、
果たして本当にスポーツを把握することが出来る
のだろうかという疑問が湧いてきた。そんなこと
から全体計画を「スポーツと資本主義社会」ない
し「オリンピックと資本主義社会」として、包括
的に把握しようと計画した。したがってこれまでの
研究はその一環に位置付き、そしてこの『アマ
チュアリズム論』も『プロ・スポーツ論』とペア
で、資本主義社会におけるスポーツの在り方を探
るものである。

ともあれ、アマチュアリズムの歴史は、イギリ
スを中心としている。それも主にロンドンを中心
とするイングランド南部の、オックスフォード大
学やケンブリッジ大学OBやパブリックスクール
OBの多数存在する「南部」地域から沸き上がった
ものであり、北部の炭坑、鉄鋼工場が多く存在
し、労働者階級のより強い地域でのプロ・スポ
ーツの誕生とは多少歴史展開は異なる。

そればかりでなく、同じ西欧でも、ドイツ、フ
ランスにおけるブルジョアジーと労働者階級の形
成、そしてそれぞれのスポーツ参加の展開も、イ
ングランドとは異なり、あまりアマチュアリズム
を歓迎する雰囲気にはなかった。その点でもイ
ングランドとは異なる雰囲気を持っていた。特に、
戦間期になるとドイツ、フランス、チェコなど
ではブルジョアスポーツクラブに労働者階級も多
く組織され始めた。これはクラブ財政の確立のた
めでもあり、労働者階級への懐柔策の一環でもあ
ったが、これによって労働者スポーツクラブ側の危
機をもたらしていた。

それでも尚、アマチュアリズムはドイツ、フ
ランスばかりでなく、全世界へ確実に普及した。確
かに我が日本にもアマチュアリズムは伝搬し、大
きな「威力」を発揮した。それはなぜなのか。本
書はアマチュアリズムの展開を焦点とする故に、
その発祥国であるイギリスを中心として展開にな
るが、必要な範囲でそれ以外にも触れたい。（本
書は2007年2月に創文企画から出版予定。）